

1. テキスト

「内部知覚について」104頁1行目から106頁2行目まで。

2 テキスト要約

形相と働くものの関係が問題である。西田は「真に有るものは」と文章を書き起こし、「働くもの」ではなく「本体（実体）」をまず問題にする。これは主語としての形相を問題にするということである。そうして「真にあるものは、有と無を含んだものでなければならぬ」と言い、有のみならずこの「無」を含んでいることによって「一般的なるもの」が「単なる概念」か「本体」かが決まると言う。例えば「赤ならぬもの」は確かに「ならぬ」という点で無を含んでいると言えるが、それは例えば「青」という有であるにすぎず、この場合は「無」を含んでいるとは言えない。「赤ならぬもの」は「単なる概念」ということになる。これに対し判断以前の直観、あるいは述語以前の主語としての「赤」は、述語において赤と赤でないものの区別を含んでいるので、有と無を含んでいることになる。この場合「赤」は「本体」である。

ところがここでいきなり話が「働くもの」に移る。「真にあるもの（本体）」とこの「働くもの」が同じことなのかどうかはまだ分からない。そうして「働くものは、自己の中に自己の内容を超越したものを含んで居なければならぬ」、視覚作用が赤いということではできないが、赤や青の色は視覚作用によって成立する、と述べる。そうして「真に働くもの」は「述語」にもならず「主語」にもならないとされる。それは「自ら変ずるもの」で「有」とも言えない。

しかし続きを読むとまたしても話が形相、したがって主語に突然移る。そのように見える。というのもプラトンのアイデアが問題となっているからだ。ここで問題になっているのはプラトンの対話篇『パルメニデス』（132d-133a）だ。プラトンの対話編は生前のソクラテスが主たる主人公となる「初期対話篇」別名「ソクラテス的対話篇」、プラトンが独自の思想であるアイデア論を展開した「中期対話篇」と、この『パルメニデス』を嚆矢とする「後期対話篇」に区分される。『パルメニデス』篇では老パルメニデスが若きソクラテスを相手にアイデア論の吟味を行うという設定になっている。若きソクラテスはあっさりアイデア論の難点を認めてしまうが、このことの意味が問題である。プラトンは後期になって自らのアイデア論を放棄したのか。そんな説も出てくる。しかし同じ後期対話篇の『ティマイオス』では大々的にアイデア論を用いて宇宙創成が語られている。そこで後期になってアイデア論を放棄したとする向きはこの『ティマイオス』を中期の作に組み入れようとする。しかしそれは困難なようだ。そうするとプラトンがアイデア論に対する反論をあえてパルメニデスに語らせ、これをアカデメイアで議論させたとも考えられる。このアイデア論批判はアリストテレスでも「第三の人間」という形で受け継がれている。アリストテレスはプラトンがアイデアをウーシアとしたことに反発し、普遍はウーシアではないという説を展開している。

因みに実在のパルメニデスは「あるものはある、あらぬものはあらぬ」から、「あるもの」は一、不動、不変であり、多、動、変化などは死すべき人間の感覚による虚妄だとこの世（感覚界）を否定し去った（もちろんここには「否定されるものは存在しなければならない」という深刻なパラドクスが存在している）。

その後「現象を救え」というスローガンの下、「あらぬものも空虚としてある」という反論を基に原子論を展開したデモクリトスなどが出現した。これに対しプラトンは現象界を虚妄として捨て去るのではなく、「ありかつあらぬもの」として、これと「あるもの」であるアイデアとの関係を考察している（もちろんここにも「ありかつあらぬもの」の「存在」を認めるという深刻なパラドクスがある）。プラトンは中期対話篇でアイデア（ Φ ）と現象（ F ）、例えば三角形のアイデアと個々の三角形、美のアイデアと個々の美しいものとの関係を F が Φ を「分有」するという用語を用いて説明していたが、後期になると F が Φ

に「似ている」という、「原型・似像」用語で説明するようになったとする説もある（藤沢汎夫）。しかし『パルメニデス』篇では原型・似像用語によるアイデア論も老パルメニデスによって否定されていることにも注意が必要である。

アリストテレスはプラトンのアイデア論批判を行い、その根拠に上述の「第三の人間」のアポリアを挙げている。そうして「あるもの」（ウーシア）はアイデア（普遍）ではなく、まずは個物であると主張する。それは「同一のまま反対の性質を受け入れるもの」であり、まさに「ありかつあらぬもの」である。個物をウーシアとしたところに大きな逆転があるが、アリストテレスは「この人間」を「この人間」たらしめるものは「人間」の形相であるとする点でウーシアは形相だと考えている。アリストテレスは一体ウーシアを個物と考えているのか形相（普遍）と考えているのか、この矛盾をアリストテレスは知っていたと思われる。プラトンの場合がそうであったようにここでも問いは我々に投げかけられている。私は次のように考えている。アイデア（形相）が「ある」というのと、感覚的な事物が「ある」というのとでは「ある」の意味が異なっており、アイデアの有を感覚物の有の如くに扱うことが深刻なパラドクスを引き起こしているのではないかと、そのように考えている。これは西田で言えば直観の有と反省の有の区別（さらにはハイデッガーの有（存在、*Sein, Seyn*）と有るもの（存在者、*Seiendes*）の区別）に関わると思われる。もちろんこの区別、さらには両者の関係をどのように考えるかはさらに難しい問題である。

テキストに戻る。アリストテレスの「第三の人間」での議論は『パルメニデス』篇のそれとは少し異なっているが、西田が紹介しているものとはほぼ同じである。A と B とが似ている（F）として、その根拠は〈似〉のアイデアということになる。しかし F が〈似〉に似ているとするならば F と〈似〉の間にまた〈〈似〉〉が立たなければならないことになる。こうしてアイデアが無限に措定されることになる。このアイデア論のアポリアに対する西田の解釈がここで述べられていると考えることができる。

A と B が似ているということはある視点から言えることである。別の視点から見れば似ていないということである。それ故〈似〉のアイデアは似と非似の統一でなければならない（「類似の理念は…類似と非類似との統一でなければならぬ」）。これは先の「本体（実体、真にあるもの）」ないし「一般的なるもの」が有と無を含み、或るものと他のものという自己の内容を「超越」している、という叙述につながるものと考えられる。「第三の人間」によるアイデア論批判はアイデアと個々の事物を同列に扱うところから生じている。ところが西田の考えるアイデアは個々の内容を「超越」している。それ故個々の事物と同列に扱うことはできない。無限措定は禁止されることになる。こうして似と非似を区別するものは〈似〉のアイデアと呼んでよいことになる。「類似と非類似とを分つものが亦類似の理念による時、之を類似の理念と称し得るではないかと思う」。これが西田のアポリアに対する態度表明である。

同様に我と非我が対立するが、この対立を知るものが我であるために、両者を統一し、その内で両者を区別するものは我である。また一と多を対立させるものは一、有と無を対立させるものは有であることになる。類似の理念は何物にも類似しないものであるのと同様、有もどこにもないものであり、その意味では無にしてそこからすべてのものが立ち現れる根拠として全体ともいえる。これはベーメの「無底」「無にして全体」を思わせる。また書かれてはいないが「我」についてもフィヒテの「絶対我」を念頭に置いているのかもしれない。

ここまではアイデア（形相）の話であり、主語に関わることである。ところがここからまたしても「真に働くもの」に話題が移る。赤の知覚は赤ではないが、それによって赤が成立する、と以前の叙述が繰返される。そうして以下の難解な文章が続く。

性質的なるものが自分自身の上に立つ時、それが純なる作用となるのである。此作用をその性質によって名づけることができるのであろう。

「性質的なるもの」は赤や青に対する「色」であり、我々の解釈では述語以前の主語、判断以前の直観であった。それが「自分自身の上に立つ」とはどういうことであろうか。まず「自分」とは何であろうか。次に「それが純なる作用となる」とあることから、純なる

作用となる以前の作用と考えることができる。逆に言えばある作用が純なる作用となる時、性質的なるものが自分自身の上に立つのである。これは何を言っているのであろうか。これも一つの暫定的な解釈でしかないが、働くものが直観にまで純化され、純なる作用となる時、判断以前の主語である「性質的なるもの」が自己の上に立ち現れる、或いは性質的なるものの中に作用が没入するときに、作用は純なる作用となる、そのように考えることができる。そうしてこの純なる作用が「性質的なるもの」によって、例えば視覚作用となり、色が主語となって、それについて赤であるという述語が可能になるのである。とりあえずそのように解釈できるが、確信は持てない。いずれにしてもここも結論を急いだ言葉足らずの叙述であることは明らかである。

哲学的問い

「真にあるものは個物であるか、普遍であるか」